説教20220306ローマ5：12-19マタイ4：1-11「恵みが働くとき」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

私たちはイースター、今年は４月17日になりますが、に向けて、今、受難節を歩まされています。受難節は、今日のマタイ福音書に記されています、イエス様が荒れ野で過ごされた40日間のことを覚えて過ごすシーズンです。又、私たち人間は、エジプトを脱出してから４０年間を、シナイ半島の荒れ野で過ごしましたから、そのことも併せて想起していく時でもあります。イースターの直前の40日間というのは、私たちが、それることなく十字架の死へと導かれ、確実に復活の命にあずかることが出来るよう、主なる神も、いわば正念場として私たちを見ていて下さる時でありましょう。その正念場にあっては、聖霊の働きが先ずもって大切であります。断食すると聖霊の働きが増し加えられます。私たちは断食をして、イエス様のまことの食べ物である御言葉に集中して参りたいと思います。

さて、一昔前に、「東京砂漠」という歌謡曲がはやりました。もう40年ほど前のことになりますが、この曲はテレビのコマーシャルでも歌われ、人口に膾炙しました。そして今の世の中はどうでしょうか。日本中が、いや世界中が砂漠のような寄る辺ない、窮乏した世界となってしまったように私には思われます。食べ物が無いというわけではないですが、食べ物は何か粗末に扱われています。世の中は合理化され確かに日々の生活はとても便利にそして快適に送れるように整えられましたが、そのことがかえって人々を孤独にしてしまったという側面も否めません。このように思いめぐらせば、私たちは今、充分に荒れ野に置かれているのではないでしょうか。水も食物も便利に手に入るのに、私たちは荒れ野に居るのです。さらに言えば、出エジプトの後、人々はシナイ半島の荒れ野では、集団生活をしていました。その荒れ野では物理的に人々が群れとなっていなければ、命を保つことが出来なかったからです。しかし、今の世の荒れ野では、人々は必ずしも物理的に群れになって生活する必要はなく、群れになることが生命維持の必須条件ではないので、一人暮らしの人も増えて、そこで孤独に苦しむ人も多くなりました。。更に、インターネットを通して、実際に合わなくても一定の群れを形作ることが出来るようにもなり、事態は入り組んでいます。

そんな困難の度合いを増してしまった、入り組んだ現代の荒れ野を、一言で言い表せば、やはり救い主イエスキリストがいない荒れ野、御言葉が飢餓状態にある荒れ野と言えるでしょう。

イエス様は荒れ野にあって、一対一で、といっても悪魔のほうは大勢でしたが、悪魔と対決されました。ではイエス様を誘惑した悪魔の言葉を具体的に見ていきましょう。まず「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」です。正直言って、現代の荒れ野ではこの言葉は誘惑の言葉にはなりませんね。しかしシナイ半島の荒れ野ではこれは将に誘惑の言葉でした。想像してみてください。足元には石ころばかりが転がっているのに、群れを養わなければならない群れの指導者の心境を。その指導者は石がパンであればと願ったことでしょう。そのような切実な願いがあるところに又、悪魔が付け入るすきもあるのです。では現代の荒れ野で人々を誘惑する悪魔の言葉には、例えばこんなのがあるかもしれません。「これらの時間がパンになるように命じたらどうだ。」どうでしょうか。誘惑の言葉に聞こえましたか。

さて、この第一の誘惑の言葉に対するイエス様のお答えは、「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」でした。

そして次に第二の誘惑の言葉です。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」悪魔は、自分も聖書に詳しいことを誇示しながら、イエス様を自分の思惑通りに動かそうとしています。こちらの誘惑の言葉はそんなに苦労しなくても現代の荒れ野に適用することが出来ます。なぜなら現代は、権威ある専門家の言葉を利用して、自分の都合の良いように相手を動かそうとする思惑に満ち満ちているからです。この誘惑に対するイエス様のお答えは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」でした。

次に第三の誘惑の言葉です。悪魔は言います。「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」この悪魔の言葉は、まぎれもなく現代の荒れ野を歩む全ての人の心に響いてしまう誘惑の言葉でしょう。ひれ伏して拝む、という事は、もしクリスチャンならば、主イエスに対して日々行っておりますので、お分かりになられますが、まだ信仰を得ておられない方の為に説明しておきたいと思います。ひれ伏して拝む、という事は、神社仏閣などでしかるべき所作でもって儀礼をおこなうという事などに限りません。日常生活においても、ひれ伏して拝むことは、そっと行われています。例えば受験生ならば、いつの間にか、志望校に入るために勉強することが、即ちひれ伏し拝むことになっていることもあるでしょう。また、出世欲にかられた社会人ならば、上司にへつらっていることが、即ちひれ伏し拝むことになっています。又、結婚願望に心奪われている人ならば、相手を得ようと努力していることが、即ちひれ伏し拝むことになるでしょう。このように、ひれ伏し拝む、という事は、現代人が多くやっている事にも関わらず、そのことが分かっていない、或いは自覚されていない、又共有して認識されていないことが、更に誘惑される度合いをひどくする要因にもなっているでしょう。

そして、の句の「これをみんな与えよう」という誘惑の言葉にも、現代人は実に弱くて、多くの場合にこの言葉でノックアウトされることも多いように思います。ちょっと厳しい見方かも知れませんが、私たちは東京砂漠が　はやった40年前から、ずっと多かれ少なかれ「これをみんな与えよう」という誘惑の言葉に踊らされて、今にまで至ったのではないでしょうか。。先週は「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」というイエス様の言葉を聞きましたが、この御言葉と較べますと、悪魔の「これをみんな与えよう」という言葉との違いは歴然としています。確かに、両者とも与えよう、と言われているのですから、同じようなものだと思われるかも知れませんが、みんな、ということと、みな加えて、という事はそれこそ天と地ほどの違いがあるのです。こんな簡単な言葉遣いの違いの中に、イエス様と悪魔の違いが顕著に顕されているのです。

私たちは「みんな」という言葉に魅了されてしまいます。例えば、「私はあなたに全てをみんな捧げます」などと言われてプロポーズされたら、舞い上がってしまうかもしれませんね。でも、そんな風にその時、最高潮の言葉を言ってしまえば、後に続く言葉がかなりつらくなるかも知れません。それに比べてイエス様の「みな加えて与えられる」という御言葉は静かではありますが、確実であり、しかも少しづづ上昇していく喜びがあります。みな加えて与えられるのであれば、私たちは最後の最後まで、恵みが働く時を味わいながら少しづづ歩みを進めていくことでしょう。

私たちは、聖書の言葉遣いを繊細に受け取っていかないと、思い違いしてしまう事にもなりかねません。「これをみんな与えよう」という挑発する言葉と、「みな加えて与えられる。」というイエス様の恵みの御言葉とは、受け取る私たちの心が荒れていて、聞き分ける力を失っていれば、いとも簡単に一緒くたにされて、私たちの心に悪魔が付け入るスキを与えてしまうのです。

この第三の誘惑の言葉、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」に対するイエス様の答えは、「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」です。イエス様は激しく「退け、サタン。」と叫ばれたことでしょう。私たちもこの悪魔の誘惑に対しては、きっぱりと「退け、サタン」と言わなければなりません。と言っても、誘惑する上司に面と向かって「退け、サタン」と叫ぶのはお勧めできませんが、そのような毅然とした覚悟と態度をもって、自分の中に悪魔を入れさせないという事であります。

この様に、マタイ福音書に記されています荒れ野の誘惑は、現代の荒れ野を歩まされるわたしたちが直面している誘惑でもあります。私たちはイエスキリストが体験された誘惑の出来事を通して、より身近に　より真剣に、神の恵みと義の賜物を豊かに受けられるように変えられていくでしょう。。それは、私たちが一人のイエスキリストを通して生きることで、多くの人がその恵みを受けられるようになることです。その原理をパウロは今日のロマ書で難しく説明していますが、そのことを多少かみ砕いて説明しましょう。

「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。」今日のロマ書の最後、19節にはこのように語られています。私たちは、多くの群れとなってイースターを迎え、多くの人と共に永遠の命へと歩んでいきたいと願っています。でも、イースターに至る前のこの受難節の日々は、何か一対一で悪魔と対決せざるを得ない、真剣勝負に伴う、孤独との闘いのようなものが実際にはあるでしょう。確かに悪魔の思惑は、私たちを孤立させ孤独の苦しみを味わわせることにあるからです。

イエスキリストも荒れ野の誘惑に於いて、ただ一人で悪魔たちと戦った感があります。しかし実はそうではありませんでした。イエス様は、十字架に向かう時、人としては罪を犯したアダムに連なる者でありながら、同時に神の子として全く父なる神の意思に従順な者となられました。そのイエスキリスト一人の従順によって、悪魔はキリストに歯が立たなかったのです。将に父と子は一体となって、悪魔に対抗したのでした。

翻って、私たちの悪魔との闘いはどうでしょうか、私たちはただ一人で悪魔と戦わなければならない、などど孤独に打ちひしがれているかもしれません。でも実はそうではありません。信仰によって父の子とされた私たちは、常に主イエスと共に戦うことが出来ます。それは孤独な戦いではないのです。

キリストは一人でありながら全てである、という事ですが、その私たち人間からは不思議に見えるキリストの姿を今日も覚えながら、この受難節の日々を私たちは共に悪魔と戦って参りたいと願います。

お祈りします

天に居ます

私たちは４月17日の復活祭に向けて、受難節の日々を過ごしています。どうか御子キリストが悪魔に打ち勝たれたように、私たちがあなたの憐れみによって、悪魔に打ち勝つことが出来るようにしてください。一対一の戦いの中で、信仰によって神の子とされた私たちが、実は共に戦っているという事を悟らせて下さい。

現代の荒れ野で戦っている全ての方々を覚えて祈ります。殊に今、ウクライナでの戦争に巻き込まれ傷つき亡くなられた方々、11年前の東日本大震災で亡くなられた方そして御遺族の方々を覚えます。

御子キリストは、私たちが『パンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』ことを教えられました。この御言葉の通り、私たちが口にする一言一言を吟味し、その一言によって隣人を励まし癒していくことが出来るようにしてください。

どうか私たちがつまらない言葉を口にする罪からお救い下さい。又、私たちが挑発する言葉で罪に陥ることから守ってください。

遠くにいる兄弟姉妹を覚えます。御子キリストを信じる一つの信仰によって、彼ら彼女らと、離れていても心を一致させ、この世の死をも乗り越える永遠の御国への道を祝福して導いて下さい。

父と聖霊と